

「人 の 力」

兵庫県立須磨友が丘高等学校 3年 小澤 未悠奈

「人が人を変える」私が福祉体験学習での三日間を通して学んだことだ。私が福祉体験学習に参加した目的は、私の将来の夢である看護師に近づくことだった。そのためある介護老人保健施設を伺った。そこで特に印象に残った方が三人いらっしゃる。

一人目は、足に障害があり、リハビリをしに施設に来られている方だった。リハビリをする時間になるまで車いすに座って待っているのだが、その間は何も話さず、顔の表情は少しも変わらなかった。私は無口で無表情の方はどう声をかければよいのかが分からず、話しかけても会話が途切れてしまったらどうしようという不安もあった。そのため話しかける勇気が出ず、ただ隣で黙って座っていることしかできなかった。そんな時、リハビリをするために理学療法士の方が来られた。

「ごめんね。待たせたね。じゃありハビリしに行こうか。」

と理学療法士の方が笑顔で手を差し出すと、同じように手を差し出してハイタッチをしていた。最初から最後まで表情が変わることは無かったが、理学療法士の方とコミュニケーションはしっかりとれていた。本当のコミュニケーションとは、会話ができることではなく相手と心を通わせることであり、コミュニケーションをとるには怖がらず、自分から笑顔で言葉をかけることが大切だと分かった。

二人目は、認知症のため家で過ごすことが難しく、施設で生活されている方だった。だが会話をするのは好きで、私にも三十分程度家族の話をしてくださった。

「昔はね、夫と二人で喫茶店をしていたの。夫はすごく料理が上手で、いつもお客さんに『マスター、マスター』って呼ばれていたわ。私がお客さんに怒られるといつもかばってくれたの。息子も夫に劣らず良い子でね。この間も果物をもってきてくれたの。息子は私のことが大好きでね、来る度に『お父さんと二人っきりは嫌。お母さんと早く一緒に暮らしたい。』って……。」

と話しながらずっと泣いていた。私はこの方の痛みを少しでも和らげることができたらと思い、手を握って相槌を打っていた。話をした次の日、私と話したという出来事はその方の記憶から完全になくなっていた。だが、家族の記憶は三十分も話し続けることができるほど鮮明に残っていた。「家族」という存在はやはりかけがえのないものだと思い知らされた。私は今、祖父母と母と住んでいる。だが、ストレスを家族にぶつけたり、きつい言葉を発してしまったりする。そうした態度を改めないといけないと、この方との話を通して痛感した。

三人目は、「そうめん流し」のイベントに参加した方だ。「そうめん流し」は毎年その施設で夏に行われる行事の一つである。多くの方が参加し、器用にそうめんを箸にひっかけて食べていた。だが、そうめんをとれず、一口も食べていない方がいた。

「もう帰る。こんな速いのとれへんわ。」

と怒っていた。私はせっかく来ているのに食べないのはもったいないと思い

「一口だけでも食べよう。」

と声をかけ、代わりにそうめんをとってつゆに入れてあげた。すると

「おいしい。おいしい。」

と言って、最後にたくさん食べて帰ってくださった。私は少しそうめんをとるお手伝いをしただけであったが、喜んでくださったことがただ単純にうれしかった。

私は三日間を通して、職員の方が利用者さんの心を変え、利用者さんが私の心を変え、私が利用者さんの心を変えるという三つの体験をした。同時に現在急速に発達している AI がこの技術を持つことは無いと思った。人は私たちが想像するよりも大きな力を持つ。わたしはこの大きな力を「看護」という場で十分に発揮したい。